



Title	北海道大学ピア・サポートの誕生と展開：つながり創出型ピア・サポートの提案
Author(s)	岡本， 健
Description	2. 北海道大学ピア・サポートの誕生と展開経緯
Relation	北海道大学ピア・サポート活動報告書（平成22年度版） pp. 5-25
Issue Date	2011-03-31
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/45441
Type	report
File Information	02.pdf



2. 北海道大学ピア・サポートの誕生と展開経緯

つながり創出型ピア・サポートの提案

2. 北海道大学ピア・サポートの誕生と展開

つながり創出型ピア・サポートの提案

岡本健¹

2. 1. 目的と背景

本稿では、北海道大学で2009年11月より開始された北海道大学ピア・サポートについて、その誕生と展開経緯、業務の具体的な記録、統計、などを整理、考察することによって、ピア・サポートの新たなあり方として「つながり創出型ピア・サポート」を提案する。

近年、ピア・サポートが小学校・中学校・高校・大学などの教育機関、医療の分野、就職支援の分野など、様々な現場に導入されている。ピア・サポートとは、「仲間による支援・援助活動」である(早坂 2010)。非専門家による対人的援助、という意味では、セルフヘルプグループと類似するところもあるが、「ピア・サポーターとして訓練を受けた者が自覚をもって仲間を支援・援助する」という点で異なっており、ピア・サポーターは独自の働きをするものとして位置付けられている(早坂 2010)。早坂(2010)では、ピア・サポートを「悩みがあるときには多くの生徒はまず友だちに助けを求める」という事実に基づく生徒の援助方法の1つであり、教育方法の1つでもあるとしている。

実際、土屋(2011)で示された法政大学における調査の結果によると、悩みの相談相手としては、「先輩・友人」が55.7%、「両親」が32.5%、「教職員」が2.5%、「学生相談室」が1.6%という結果となっており、早坂(2010)の主張を裏付ける結果となっている。

北海道大学においては、この傾向はどのようになっているだろうか。北海道大学学務部(2006: 39)によると、「健康不安に関する主な相談相手²」として、学部生の回答者全体³では、「北大の友人・先輩」が36.8%、「家族」が27.4%、「その他の友人・知人」が19.5%である。ついで、「相談相手は不要」が8.1%、「相談できる相手がいない」が4.9%と続いている。「学生相談室」、「保健管理センター」、「一般の医療機関」は全体に占める割合が1%以下となっている。大学院生の回答者全体では、「北大の友人・先輩」が28.8%あり、「家族」が25.9%、「その他の友人・知人」が25.6%である。続いて「相談相手は不要」が8.7%、「相談できる相手がいない」が5.4%を占め、「一般の医療機関」、「北大の教

¹ 北海道大学ピア・サポーター代表

北海道大学大学院 国際広報メディア・観光学院 観光創造専攻博士後期課程

北海道大学 観光学高等研究センター リサーチアシスタント

大阪観光大学 観光学研究所 客員研究員

² 健康不安とは、身体的なものも精神的なものも含む。

³ 男女別の統計なども掲載されている。

員」が 2.3%、1.5%と続いている（北海道大学学務部 2006: 89）。「北大の友人・先輩」と「その他の友人・知人」を合わせると、学部生で 56.3%を占め、院生で 54.4%を占めている。北海道大学においても、不安の相談相手は、友人や先輩、知人であるという回答の割合が高く、この点に関しては同様の傾向を示していると言えよう。

早坂(2010)は、学校でのピア・サポーターの役割として以下の5点を挙げている。1点目は「先輩や友人」の役割、2点目は「相談相手」の役割、3点目は「調停者」の役割、4点目は「教育者」の役割、5点目は「学習支援者」の役割である。1点目の「先輩や友人」の役割とは、「下級生に規範を示したり、友達がいない生徒の友達になる」ことである。「相談相手」の役割とは、「気軽な相談窓口となって話を聴く」というものである。「調停者」の役割とは、「生徒間のトラブルを収める」役割である。「教育者」の役割とは、「いじめや薬物依存などの問題について考える」ものである。そして、「学習支援者」は、「学習面について助言したり指導する」という役割を示している（早坂 2010）。大学生活にあって、大学生は様々な悩みを抱えることが多く、制度的ではなくとも、これらの役割を担うアクターが必要となるだろう。しかし、学生のライフスタイルの変化やコミュニケーションのあり方の変化などから、ピア・サポート機能が自然発生しにくい状況、あるいは、そうした機能の恩恵を受けにくい学生が出て来始めているのであろう。

特に、筆者が北海道大学ピア・サポート設立の背景として、重要視している点は、学生のコミュニケーションのあり方に関する点である。この点については、土井(2008: 198-200)で以下のように述べられている。現在は、学校教育の現場で「コミュニケーション力」や「人間力」の涵養が重大なテーマとなっている。特にビジネスの現場で強く求められる能力として、これらが必要とされている。こうした価値観が支配的になることで、「腹を割って話しあい、互いの人間性を高めていけるような対人関係を築く能力」は重視されず、「いろいろな交渉事をスムーズに進め、場の空気を敏感に読み取って迅速に対処できるような対人関係の能力」が必要とされるようになり、「人間としての評価」もこうした能力の有無によって左右される事態になっている（土井 2008）。さらに土井(2008)は、「かつてなら、ビジネスライクな人間関係が苦手だったり、あるいはそれを嫌悪する人びとにも、社会的にじゅうぶん評価されうる居場所があった」とし、現在では、こうした人物は、十分な評価を得にくく、特に若者の間でそうした傾向が強くなっていると指摘している。こうした価値観からは、以下のような行動が起こり得るだろう。「社会のルール」に極めて敏感で、そこから外れることを恐れる、あるいは逆に、「社会のルール」を敏感に関知し、それをメタに認識し、様々なキャラクターを演じ分けることで、他者をだしぬいて生きていく、というような行動様式や価値観である。そのことを 90 年代、2000 年代の映画やアニメ、ドラマを分析することによって表現したのは宇野常寛氏である。宇野(2008)では、『無限のリヴァイアス』『バトルロワイヤル』『DEATH NOTE』『コードギアス』『LIAR GAME』などの作品を取り上げ、分析することで、上の

ような状況を詳細に描き出した。中でも『野ブタ。をプロデュース』の分析では、前述したような、場の空気を敏感に読み取ることが若者の間で重要視されている、ということが良くわかる。『野ブタ。をプロデュース』は、学校の教室での出来事を描いた作品である。宇野(2008)によると、この作品は、学校という小さな共同体におけるキャラクターをめぐる闘争を描いたものである。この場合のキャラクターとは、「拭い去れないその人の個性」としてのキャラクターではなく、「所属する共同体の中で与えられる位置」としてのキャラクターである(宇野 2008:163-164)。ここから導かれるのは、自分というものを極めて相対的に位置づけ、その場の空気を読み取ってコミュニケーションが円滑に進んでいるように見せかけることに注力する、価値観や行動様式であろう。それはあくまで「見せかけ」であるし、価値判断の基準が自身ではなく、他者の評価や、他者からのキャラクター認知、などにあるため、アイデンティティの確立や、人とのつながりで得られる安心感は得られない。菅野(2008: 148)では、このことを次のように表現している。「ノリとリズムだけの親しさには、深みも味わい」もなく、「希薄な不安定な関係」しか構築できなくなると。

実際、筆者は博士課程の大学院生として生活していて、上のような価値観に遭遇することが多いように思う。他人が何をしているのか、教員が自分のことをどう思うのか、先輩が自分のことをどう思うのか、そのことばかりに気が取られ、「自分が本当にやりたいこと」を見失ってしまう、あるいは、見つけることができない学生の姿である。これは、学部生に限らず大学院生であっても頻繁に見られる姿である。それは、休学や退学、などにつながり得るだろうし、教員との関係のこじれも招くだろう。本来大学は、「ノリとリズム」ではなく、物事の様々な側面をフラットにじっくりと考えることができる自由な環境であるはずなのだ。そして、多様な価値観が認められ、議論を通して、その多様な価値観を学びあっていく場であるはずなのだ。それが、言葉は悪いが就職予備校のような様相を呈したり、円滑くに見える＜コミュニケーション＞の構築に腐心したり、ビジネスをしたり、する場になっていまいか。

これは、筆者が考える「北海道大学ピア・サポート」の必要性の背景であり、北海道大学ピア・サポートの正式な設立背景とは異なる部分もあることをお断りしておきたい。また、筆者は北海道大学ピア・サポートの代表として、関連する様々なアクターと協力し、組織を動かしていくことが肝要であると考えており、そうしたことをないがしろにするための主張ではない。ただし、この部分に目をつぶって、「教員の立場から見て円滑くに見える＜コミュニケーション＞」がなされていることに満足しているようでは、本当のピア・サポートシステムの構築には程遠いと思う。学生同士は学生同士のルールで動いている。それは、教員が考えている以上に異なるルールである可能性も無視してはならないだろう。本稿では、このような背景で、様々な価値観を持った学生が共にいることが許される場を構築するためのピア・サポートのあり方を考察する。

2. 2. ピア・サポート設立準備委員会の開催

2009年5月14日に第1回ピア・サポート室設立準備委員会が開催され、続いて6月19日に第2回、7月16日に第3回の設立準備委員会が開催された。設立準備委員会には、後述する第1期ピア・サポーター5名（学生）も参画し、教員は積極的に学生に意見を求める形で会議を進めていた。

このように、北海道大学ピア・サポートは、設立準備委員会の段階から、学生を出席させており、意思決定場面に参画させている。

2. 3. 学生ピア・サポーターの募集

ピア・サポーターの募集に関しては、他大学のピア・サポート実践の中でも重要な点とされている。継続的なピア・サポーターの補充に苦慮している大学もある。ここでは、北海道大学ピア・サポートにおける、学生ピア・サポーター募集の仕方について、整理しておく。

学生ピア・サポーターは設立準備委員会の教員2名それぞれが、学生にピア・サポート活動への参加を打診する形で募集された。具体的には、ピア・サポート室設立準備委員会委員長である近久武美教授と、ピア・サポート室設立準備委員会委員である細川敏幸教授によって、学生が招集された。この教員によって招集されたピア・サポーターを「第1期ピア・サポーター」とする。第1期ピア・サポーターは、代表の岡本健（国際広報メディア・観光学院:博士後期課程2年⁴）、青井標野（工学部:修士課程1年）、藤原美津穂（工学部:修士課程1年）、奥塚哲史（工学部:学部4年）、高橋修平（工学部:学部4年）の5名である。第1期ピア・サポーターは設立準備委員会に出席し、設立準備委員会とは別に、第1回ピア・サポート学生会議（6月19日の17:00～19:00）、第2回ピア・サポート学生会議（7月3日の18:00～19:00）を開き、ピア・サポートの広報（ピア・サポーターの募集方法・ポスター、案内看板、HP、PR用パワーポイント）や実施体制（ピア・サポート室開設時間および勤務形態・研修内容および日時・業務マニュアル）、学生活活性化プロジェクトについて学生会議による決定を行い、第3回設立準備委員会において、学生会議の報告を行い、教職員からアドバイスを受けた。その結果、学生募集については、第1期メンバーの紹介によって行うこととした。

第1期メンバーの奥塚氏が浦家奈々（農学部:学部3年）に話を持ちかけ、浦家氏から、厨川知彦（法学部:学部3年）、青柳祥子（農学部:学部3年）にピア・サポーターの話が伝搬した。さらに、厨川氏が小林なつみ（教育学部:学部3年）にピア・サポーターに関する話が伝達された。一方で、第1期メンバーの岡本は平侑子（国際広報メディア・観光学院 修士2年）、中根宏樹（国際広報メディア・観光学院 修士2年）に対し

⁴ 学生の学年は平成22年度時のものに統一してある。

て、ピア・サポート活動の勧誘を行った。こうして、第1期、第2期合わせて12名体制でピア・サポートが本格的にスタートした。その後、通常の相談業務をはじめとして、名古屋工業大学で開催された「びあのわ」への参加や、交流創出イベント「本活」⁵、新ピア・サポート室への移動⁶、広報ビデオ「苦楽戦隊 ピア・レンジャー」の制作⁷などを、第1期、第2期のメンバーで行った。

2011年4月（平成23年度）には、新たな入試制度によって新入生が入学してくることとなった。新ピア・サポート室に移行してから、初の新入生を迎えることとなる。また、このままのメンバーで推移した場合、平成23年度には、学部4年以上の人員のみになる。そうすると新入生と年齢が離れてしまい、ピア・サポートの円滑な運用に支障をきたすことが考えられた。また、ピア・サポート業務の手続きや、その手続きを取っている理由などを後進のピア・サポートに伝えていく必要がある。そのため、新たなピア・サポーターを募集することになった。

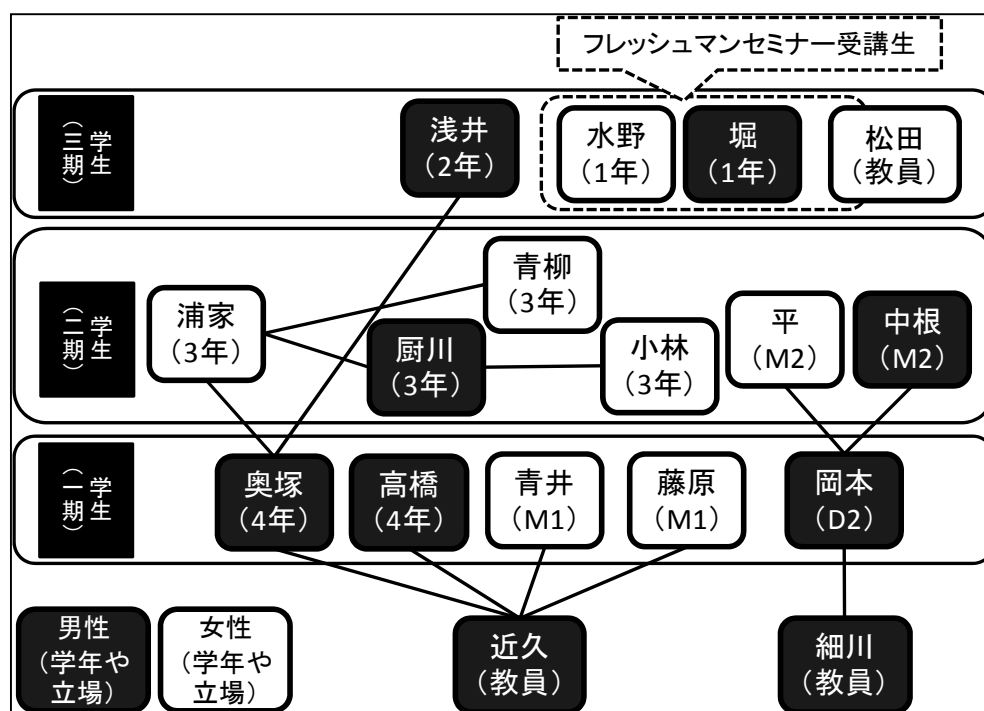
その際、筆者は人づてでの募集だけではなく、一般からの公募が重要であると考えた。メンバーの人づてでの募集であれば、一定程度の同質性が確保されているがゆえに、意思疎通は図りやすいものの、多様性が弱くなり、仲間意識が強くなりすぎ、排他性を帯びる可能性を心配したのである。ピア・サポートは公共のための組織であり、多様な価値観を認めるような活動をしていく組織である。それゆえ、趣味のサークルや部活に見られるような一体感を志向するのではなく、より柔軟で多様性のある組織にすべきであろう。組織内に多様な個人を抱えることによって、イベント企画や相談体制も、多様な価値観の学生を受け入れることができるものとなることが期待できるからである。そのような折に、2010年度後期の松田康子准教授の講義「学生支援におけるピア・サポートを考える」が開講された⁸。この授業は主に1年生向けの「フレッシュマンセミナー」と呼ばれるものである。この講義には、ほぼ毎週ピア・サポーター1～4人が参加させていただいた。本講義の進行の中で、松田先生には何度か発言の機会をいただき、そういった場や授業支援の場で、ピア・サポーターを募集している旨を告知した。松田先生の講義を受け、ピア・サポートに参画してみたいと感じてくれた堀翔太郎（文学部:学部1年）、水野愛海（教育学部:学部1年）が新たにピア・サポートメンバーとして立候補した。さらに、第1期メンバーである奥塚氏の紹介で、浅井俊行（工学部:学部2年）がピア・サポートメンバーに入ることとなった。2011年4月から実働に入る浅井氏、堀氏、水野氏を第3期メンバーとする。ここまでのメンバーのつながりを図示すると、図1のように整理できる。

⁵ 「本活」の詳細は、本報告書第3章をご参照いただきたい。

⁶ 新ピア・サポート室への移動に関して、ピア・サポート室の位置と環境については、本報告書第4章をご参照いただきたい。

⁷ 「苦楽戦隊 ピア・レンジャー」の詳細は、本報告書第5章をご参照いただきたい。

⁸ 全学教育フレッシュマンセミナー「学生支援におけるピア・サポートを考える」の詳細については、本報告書の第8章をご参照いただきたい。



*学年は、平成22年度のもの

図1 ピア・サポーター集めのネットワーク

図1の左下が凡例となっている。黒地に白い文字で表現されているのは男性であり、白地に黒い文字で表現されているのが女性である。時間軸に沿うと下から上に紹介が行われている。2期の構造が複雑であるが、奥塚氏から浦家氏に、浦家氏は青柳氏と厨川氏に、そして、厨川氏から小林氏に紹介が伝搬したということである。図の大きさの都合上、この部分だけ時間が左から右に流れている。

このように、人づての紹介であっても、多様なメンバーを集めることができている場面も見られる。特に浦家氏自身は農学部であるが、大学内での関係性によって、法学部の厨川氏に情報が伝播し、そこから、教育学部の小林氏につながっているように、学部横断的に紹介が進んでいる様子も見られる。また、第1期メンバーは著者を除くと全員が工学部であるが、専門は多様であり、また、メンバーそれぞれ同士はそこまで深いつきあいが無かったそうである。筆者の主観になるが、1期メンバーの工学部4人の個性や行動はそれぞれにかなり異なっている。ただし、ピア・サポートにおける「先輩の役割」を考えると、利用者にとって「自分が所属する学部の先輩」がいることは、利用を促進することになると考えられ、できるだけ多様な学部のメンバーがそろえることが望ましいだろう。しかし、学部はさまざまであっても、同じような趣味趣向のメンバーが集まる可能性もあり、多様性については、今後も議論が必要となろう。

第1期から第3期メンバーを合わせると、男女比は1対1であり、文系も理系もあり、

学年も多様である。全員が人づてによる紹介というわけではなく、フレッシュマンセミナーによって、公募に近いような形でのピア・サポーター採用も行われている。このピア・サポートのネットワークが今後どのように展開し、それによってパフォーマンスがどのように変化していくのか、継続的に記録していく必要がある。

2. 4. 相談者数および入室者数の記録

旧ピア・サポート室においては相談者数、新ピア・サポート室においては、相談者数と入室者数の記録を取ってきた。旧ピア・サポート室における相談者数は、2010 年 4 月に 15 人、5 月に 4 人、6 月に 3 人、7 月に 1 人、8 月、9 月、10 月は 0 人であった。11 月から新ピア・サポート室に移行し、相談者数に加え、入室者数をカウントすることとした。入室者数は、ピア・サポート室のオープンスペースに足を踏み入れた人数をピア・サポーターが目視で記録するものである。同一人物の一時的な出入りや、ピア・サポーターの入室は記録から除外している。新ピア・サポート室の相談者数は、2010 年 11 月に 5 人、12 月に 4 人、2011 年 1 月に 7 人、2 月に 4 人となっている。新ピア・サポート室の入室者数は、2010 年 11 月に 105 人、12 月に 110 人、2011 年 1 月に 120 人、2 月に 97 人となっている。これらの推移をまとめたグラフが図 2 である。

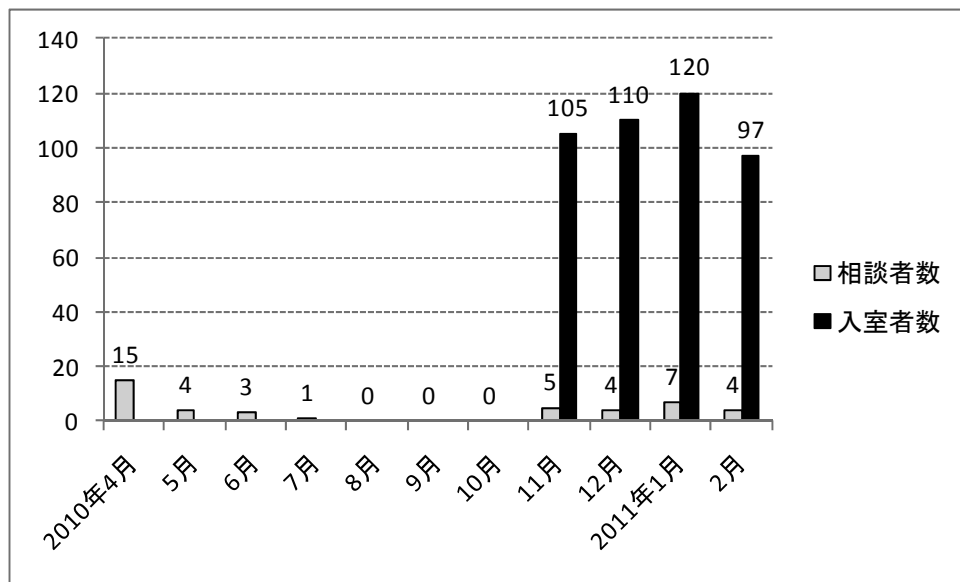


図 2 相談者数と入室者数の推移

このグラフを見ると、相談者数は 2010 年 4 月に最大の 15 を記録し、5 月(4)、6 月(3)、7 月(1)、8 月(0)と減少している。2010 年 4 月については、イベント「本活」を開催した影響が大きいと考えられる。イベント参加のついでに相談をしていく学生が複数いた。

また、他大学のピア・サポートでも、4月は新生が入ってくるため、履修やサークル等の大学生活に慣れるために情報を欲している学生が多く、相談者数が増える傾向にあるため、その影響もあると考えられる。5月以降人数が減少することも他大学のピア・サポートで同様に見られる傾向である。8月、9月は夏期休業に入っているため、学生の登校自体が少ない。特に、旧ピア・サポート室は学生の人通りの少ない場所に位置していたことも影響しているだろう。新ピア・サポート室は大学図書館の北分館に隣接しており、夏期休業中であっても学生の人通りがあり、2011年度の夏期休業中は、2010年度とは異なる結果が得られる可能性がある。

2010年11月からは新ピア・サポート室に移動した。特にイベントごとには行っていないが、立地が良くなったためか、相談者数は一定数いる状態である。相談者数に関しては、年間を通した人数の推移がまだ把握できていないため、増減についてその要因を詳細に論じることが難しい状態である。今後も記録を続け、推移を観測していきたい。

また、オープンスペースが出来たため、入室者数を2010年11月からとりはじめた。2010年11月から2011年1月にかけて人数が増えている。オープンスペースが出来た当初は、ポスターを掲載しても、「ここは自由に使ってよいのだろうか？」と疑問に思う学生が多かったようで、入るのを逡巡するような様子も見られた。詳細は本報告書の第4章に譲るが、ビラやポスター、ウェルカムボードの設置、ピア・サポーターによる声掛けや説明の励行を行うことによって、徐々に浸透させていった。入室者数推移にその成果が表れているかどうかはわからないが、オープン時には利用者に対して部屋の利用の仕方をさまざまな手段を使って告知していくことが重要であると考えられる。

特に、筆者が重視したのは、ピア・サポーターによる対面、口頭での説明である。ピア・サポーターが学生に声をかけ、口頭で部屋の説明をすることで、利用者に「ピア・サポート室にはあの人がいる」と、個人のイメージを思い浮かべてもらえるようになるのが理想であると考えている。そうすることで、ピア・サポート室に行けば話ができる、という状態を作り出すことができると考えられる。もちろん、利用者には様々な価値観を持っている者がおり、初対面の人と話をするのが苦手な場合もある。ピア・サポーターの積極的な声かけを、馴れ馴れしい態度、と認識し、嫌悪感を示す場合もあるかもしれない。その場合は、じっくり読み、情報を得ることが出来るビラを、自由に手に取るができるようにすることで解決できる。ともかく、様々な方法やメディアを用いて、情報発信をすることが重要になるだろう。一般的な学内組織の広報のやり方を見ていると、ポスターを貼る、ビラを撒く、など、凡庸かつ間接的、消極的なものが多いように思える。受け身的に待っているような形の広報では、利用者に認知してもらえないだろう。他大学のピア・サポートにおいても、広報の問題は重要であり、ピア・サポートの周知の方法に関しては、今後もさまざまな実践を積み重ね、その効果について議論を重ねる必要がある。

2. 5. 相談業務の課題

北海道大学ピア・サポートの主な役割の一つに相談業務がある。この相談業務はインターカー業務と呼ばれるものである。インターカーとは、相談を最初に受け付けたり、最初期の面接を担当したりする者のことである。北海道大学ピア・サポートでは、相談者の相談に対して、その場で解決策を提示することを目指にはしていない。学生のさまざまな相談に対応するための専門的な機関が、すでに北海道大学内には多数ある。たとえば、保健センターでは、内科診療、精神衛生相談、カウンセリング、健康相談、歯科相談を受け付けており、学生相談室では、修学や友人関係など、様々な悩み、問題に対する「何でも相談」を実施しており、アカデミック・サポートセンターでは、進路相談や学習サポートが行われている。ピア・サポーターの仕事は、インターカーとして、学生の相談を受け、適切な組織や人を紹介することとなる。

ただし、簡単な相談や、ピア・サポーター個人の経験を話して解決するものについては、その場で解決する。たとえば、「アルバイトをしたいのだが、何をすればよいだろうか」、というような相談である。これは、相談者を専門機関に振り分けるよりも、学生であるピア・サポーターの様々な経験や考え方を提示する方が本人にとって有益な情報になるだろう。それが複数人のピア・サポーターの経験や考え方であればなお良いだろう。

著者はこの部分が非常に重要であると考えている。矛盾するようであるが、他組織や人を紹介するインターカー業務を行う際にこそ、ピア・サポーター自身による解決の場面や情報交換の場面が重要であると考えている。ピア・サポーターがただの仲介者、情報提供者になってしまえば、ピア・サポートの価値が無いばかりか、メンバーのモチベーション維持も危うい。前述したように、他大学においても、新学期に多かった相談者数が徐々に減少し、それにとまってメンバーのモチベーションが低下してくることは大きな問題となっている。

岡本(2007)では、観光ボランティアガイドを題材に、決まった知識（静的情報）をただ観光客にガイドする状態、つまり、静的情報の一方向的受け渡しの状態が続くと、「知識の固定化」が起こるとしている。「知識の固定化」とは、静的情報の蓄積、交換が停止して、「動的情報」の生成可能性が低下することである。「動的情報」とは、事物に対する新しい理解や新しいやり方を指す。金子(1992)によると、ボランティアのやりがいとして、複数人が情報を持ち寄り、情報のやり取りをすることで生まれる「動的情報」を得ることがある、とされている。そう考えると、「動的情報」を得られない場に魅力を感じなくなったメンバーは、やりがいを失い、その組織を脱退してしまったり、組織にとどまりつつも、働きが悪くなったりすることが考えられる。逆に、「動的情報」が数多く生成される場であれば、メンバーのメリットも増大し、そういう場に時間的なコストをかけることをいとわなくなるだろう。

この考え方はピア・サポートの成員だけでなく、利用者にも拡張して考えることができる。利用者においても、ピア・サポート室に行き、ピア・サポーターやピア・サポート室にいる他の学生と対話し、「動的情報」を得ることができれば、ピア・サポート室に行くこと自体に価値を見出すであろう。そうやって、ピア・サポート室という場を「動的情報」が数多く生成される場所にすれば、人が集まる場所となり、さらに多くの「動的情報」を生み出すという、良い循環ができあがる可能性がある。そういった場に、既存の組織や人の紹介を「静的情報」として蓄積、紹介することで、既存組織の利用者増も見込めるだろう。

Okamoto(2008)では、これらのことを、「情報・知識供給モデル (Providing Information and Knowledge Model)」と「楽しさ共有モデル (Common Pleasure Model)」を用いて説明している。Okamoto(2008)では、学生による観光ボランティアガイドの事例を3つ取り上げ、ボランティアガイドが情報や知識を一方向的に提供する「情報・知識供給型」のガイドモデルと、双方向的に情報交換をし、楽しさを共有することに重きを置いた「楽しさ共有型」のガイドモデルを提示している。ガイド事例の分析結果を見ると、観光客のツアー前の期待は「新たな知識や情報」にあるのだが、ツアー終了後には「大学生との交流」を高く評価していることがわかった。また、ガイドへの調査でも、観光客との交流や、観光客から様々な人生経験を教わったことなどを良かった点として挙げていることが分かった。つまり、後者のモデルの方が、ガイドも観光客も楽しめる「楽しさ共有」の場ができていることを示しているのである。挙げられている「楽しさ共有型」ガイド実践の調査結果の中には、ガイドが旅行者に問われた質問に答えられない場面や、旅行者がガイドに教える場面も見られるのである。つまり、元々期待していたはずの「新たな知識や情報」が手に入らない瞬間があったわけである。しかし、旅行者はガイドが質問に答えられないことに対して腹を立てるわけでもなく、むしろガイドに向かって喜々として自分の体験談を話し、知っていることを教えるのである。そして、そのことが満足につながっているのである。

無論、観光ガイドとピア・サポートのサービスには大きな差がある。ただし、学生を成員とする組織、という意味では共通するところも多い。ピア・サポート室の場合は、正確な情報提供機能も組織を規定する上で重要な機能であるため、情報提供は的確になされなければならない。著者は、情報提供の正確さをないがしろにしても良いと主張しているわけではない。そうではなく、情報提供ができるかできないか、というところ以外の部分についても極めて重要であることを主張したいのである。システムティックに相談に対して情報を提供する、というスタイルのピア・サポートは、成員のモチベーションばかりか、利用者のモチベーションも下げることに繋がると考えられ、「集いたい場所」には到底なり得ないと考えられるのである。また、ピア・サポーターに関して期待できる、本来的なコミュニケーション能力の涵養、社会人基礎力の醸成、などを考えても、相手と対話し、相手のニーズを把握したり、自分のニーズを相手に的確に伝え

たりして、ピア・サポート室を運営していくことは重要であろう。

対面接触場面におけるダイナミックなコミュニケーションの場をいかに生み出していくか、ということが重要な点となる。

2. 6. 相談業務の手続き

基本的な相談業務の流れについて、記しておきたい。旧ピア・サポート室では、火曜と木曜の14時から18時、そして、新ピア・サポート室では、月曜、水曜、金曜の14時から18時が開室曜日および時間であった。開室時間中は常時2名以上のピア・サポーターが室内にいた。相談者が訪れた場合、相談内容をメモし、図3に示した「相談カルテ」に情報を書き込む。特に、すべてを埋めることは義務付けられていない。相談者が言いたくないことについて、無理に聞き出すことはしない。ただし、継続的に相談に来たい、というふうな希望がある場合は、同一のピア・サポーターが対応できるとは限らないため、相談の連続性を確保する必要がある、そうした場合に氏名や学生番号などを記録する場合があるため、欄を設けてある。

日付	年 月 日
時間	時 分 ～ 時 分
名前	
学生番号	
学部学科	
学年	
クラス 研究室	
相談事項	・ 学業（履修・単位取得・留学・学習意欲）
	・ 学生生活（経済問題・アルバイト・住居・サークル・部活・ボランティア・保険・国民年金・休学、退学・法律相談）
	・ 進路（転部、転学科・再受験・他大学受験・進学、進級・就職）
	・ 対人関係（友人・家族・教員）
	・ 健康問題（心・体）
	・ その他

（次頁へ続く）

相談内容	
対応	

図 3 相談カルテ

相談が終了した後は、相談カルテにピア・サポーターの対応を記し、他のピア・サポーターが閲覧できるように、パソコンにファイルを保存した上で、印刷し、ファイルに綴じている。

2. 7. 各種イベントの企画と役割

北海道大学ピア・サポートの主な役割の一つに、イベントの実施がある。これまで、「本活」「広報ビデオ制作」を実施し、2011年度からは「ピア・カフェ」を実施しようと計画している。「本活」については本報告書の第3章「人々をつなぐイベントの創出」に詳細を記し、「広報ビデオ制作」については本報告書の第5章「ピア・サポート広報の新たなかたち」に、「ピア・カフェ」については本報告書の第6章「学内でゆっくり休めるカフェ空間を作る」に詳細に記したので、併せてご覧いただきたい。ここでは、それらイベントの役割について、一つのモデルを提示して、それを参照しながら考察していきたい。

2. 7. 1. 「ぴあのわ」への参加

代表である筆者は、代表になった当初、いったい何から取り組めばよいものやら見当がつかなかった。2009年11月よりピア・サポートの試行が始まっていたが、2010年4月の本格稼働に向け、なかなか活動の方向性を見いだせずにいた。相談業務については、イメージはついたが、それだけやっていたら良いという組織ではなかったため、何か北海道大学の学生に資する活動を行う必要があると考えていた。そのような折に、2010年1月9日に、名古屋工業大学で開かれた「ぴあのわ」に参加させていただくことがで

きた。「ぴあのわ」には、ピア・サポーターは、岡本、中根、藤原、奥塚、厨川、小林、が参加した。教員は松田康子先生、渡邊誠先生、事務職員として好田知子さんが参加した。2010 年の「ぴあのわ」には、名古屋工業大学をはじめ、名古屋大学、三重大学のピア・サポーターが集い、日本福祉大学と北海道大学が初参加であった。内容としては、それぞれの大学のピア・サポーターが現状や今後の課題、相談事例などを発表するものであった。北海道大学は前述のとおり、2009 年 11 月より施行されており、特段発表するような内容が無く、メンバーの紹介を面白おかしく行い、おぼろげながら企画として形になりはじめていた「本活」の企画について発表を行った。他大学のピア・サポーターや教職員の皆様は大変あたたかく迎えてくださり、「本活」についても「良い活動なので、是非やってください」と激励をいただいた。

この「ぴあのわ」に参加したことで、他大学における様々な事例や、抱えている課題などについて学ぶことができ、北海道大学ピア・サポートを考えて行く上で一つのモデルが出来上がった。

筆者が「ぴあのわ」に参加して得た、ピア・サポート運営の課題は、大きく以下の 3 点である。1 点目は「広報の重要性」である。多くの大学で「ピア・サポートが学生に周知されていない」という問題が挙げられていたためである。せっかくピア・サポートシステムを作っても利用者があまりに少なかったり、周知がなされていない場合、機能しているとは言い難い。2 点目は、「組織としての役割の明確化」である。ピア・サポートという名称がついた組織でも、その内容は様々である。山田(2010)では、ピア・サポートの取組み内容として「新入生の適応支援、補完教育や初年次教育などでの学習支援(メンター)、オープンキャンパスやキャリアガイダンス等のイベント企画・運営、学修・進路・心理面・生活面など様々な問題に応答する「何でも相談室」における支援など」を挙げている。さらに、早坂(2010)では、大学で実践されているピア・サポート活動を、大きく分けて以下の 3 つに分類している⁹。それぞれ、相談相手としての機能を持った「相談室型」、学習支援者としての機能を持った「修学支援型」、新入生の良き先輩としての機能を持った「新入生支援型」である。「相談室型」の例として、広島大学、名古屋大学、金沢大学、岩手大学を、「修学支援型」の例として、東北大学、名古屋工業大学、九州大学を挙げている(早坂 2010)。こうした現状を「ぴあのわ」で実感し、北海道大学ピア・サポートは、誰のために何をするのかを明確化する必要があると考えた。3 点目は、「成員の維持」である。成員の維持とは、成員の人数や人材、モチベーションの維持である。本稿でも 5 節ですでにふれたが、他大学のピア・サポートの中でも話題に上る頻度が高かったのが、この成員の維持の問題である。大石(2010)でも、モチベーション低下の問題を「複数の大学の実践で報告されて」いる問題とし、「ピア・

⁹ ただし、早坂(2010)では、この分類は暫定的なものであることを示し、3 つの分類以外の事例として、看護系の大学や専門学校の研修を受けた学生が、中学や高校の生徒に性感染症予防の教育を行う取り組みも取り上げている。

サポート活動を展開する上での普遍的なテーマの一つである」と述べている。北海道大学においても、この問題が起こってくることは予測できる。特に、北海道大学の場合は、ピア・サポートシステム自体は教職員の手によって作られており、集った学生は自ら進んでというより促された格好である¹⁰。ボランティア精神にあふれ、自ら進んでピア・サポーターになった場合ですら、モチベーションの低下が懸念されているのであるため、北海道大学ピア・サポートでは、より深刻にこの問題が顕在化する可能性もあると思われる。

以上が「びあのわ」に参加して、筆者が得た課題点である。そして、これら「広報の重要性」「組織としての役割の明確化」「成員の維持」の3点は、実はそれぞれに関連が深いものなのではないかと仮説を立てた。つまり、「広報」「組織の位置づけ」「成員の維持」はそれぞれに影響を与えているということである（図4）。

その関連性について述べる。まず、広報と組織の位置づけについて考えてみたい。効果的な広報を行うためには、組織の位置づけの明確化が必要である。組織の位置づけが不明確であれば、広報のやり方が不適切なものになる場合があるだろうし、利用者に適切に伝わらないこともあるだろう。逆に、組織の位置づけが明確化していれば、それを元に的確な広報が可能になるし、広報のコンテンツも作りやすくなるため、コンテンツの制作形態や流通させる方法についての議論なども行うことができる。次に、広報と成員の維持の関係性である。広報によって相談者が増えたり、新たなピア・サポーターが増えたりすることで、成員のモチベーションおよび人材、人数の維持につながるだろう。逆に、成員のモチベーションが高く、良い人材が多く集まっていれば、そのこと自体が広報の役割を果たし、利用者やピア・サポーターも集まりやすいと考えられる。最後に、組織の位置づけと成員の維持の関係について述べる。組織の位置づけが明確化すれば、成員は誰のために何をしているのかを理解し、自らの生活の中の位置づけを明確にすることで、モチベーションが高まると考えられる。逆に、成員のモチベーションが高く、人材が豊富で人数が多ければ、組織の意味を積極的に考え、位置づけていくことができる。この構造を整理すると図4のようになる。

¹⁰ 第1期メンバーについても教員にうながされて仕方なく、というわけではなく、ピア・サポートに興味を持ったメンバーが集まっていることは注記しておく。

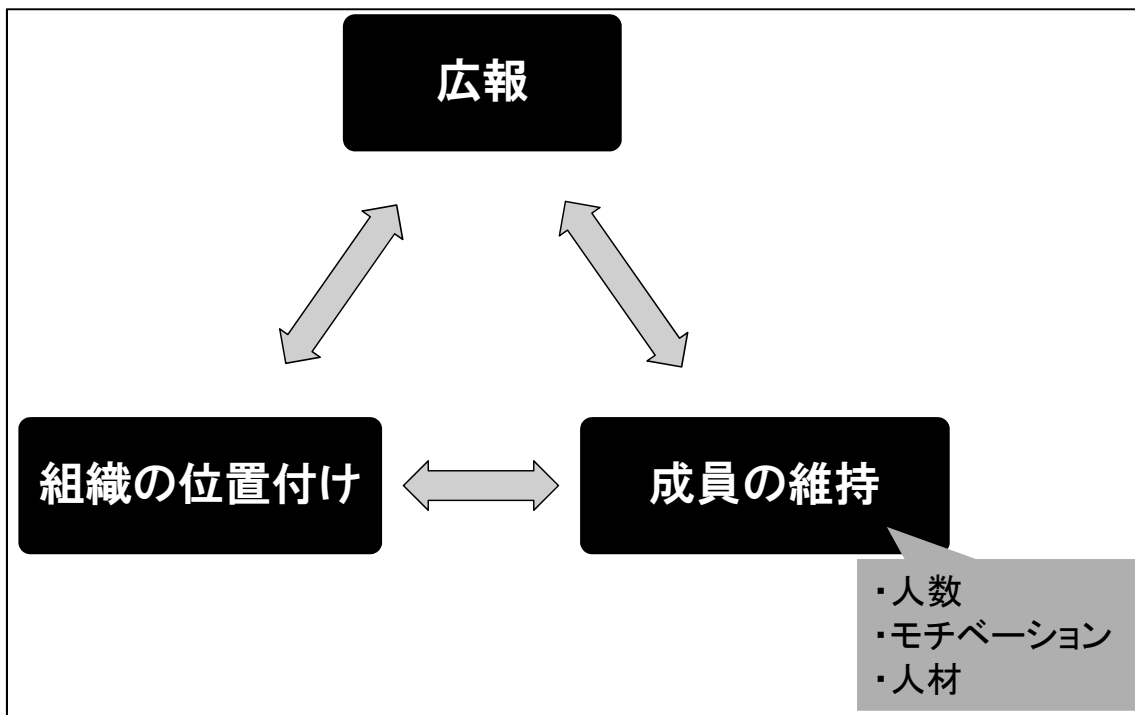


図4 広報・組織の位置づけ・成員の維持の関わり

このようなモデルを念頭に置き、その後のイベントの企画や実施について考えることにし、「本活」「広報ビデオ制作」を企画・実施した。ピア・カフェについては、企画途上であるため、分析からは除外している。

2. 7. 2. 本活

本活とは、不要になった本を学生から回収し、主に新入生に対してそれを配布するイベントである。回収の際には、本の価格や冊数に応じて文房具や生活用品、USB メモリなどと交換した。

本活を、図4で提示したモデルを元に考えてみたい。本活は、回収の利用者にとっては、不要な本を持っていけば有用な物品¹¹と交換してもらえ、頒布の利用者にとっては、無料で必要な本を得ることができるものである。このシステムを考えたのは、「広報」に関する部分を重視した結果である。ピア・サポートは、本報告書の第4章「ピア・サポート室の位置と環境」でも指摘した通り、本活開催時には旧ピア・サポート室で活動しており、学生へのピア・サポートの周知が大きな問題であった。それゆえ、たくさんの学生にピア・サポート室に来てもらい、ピア・サポートを知ってもらう必要があった。そのため、学生の間で話題になるようなイベントが必要であると考え、教科書を含む本

¹¹ ただし、有用であるかどうかは、利用者それぞれの判断によるので一概には言えない。また、利用者の中には、物品が欲しいというよりは、本活の趣旨を理解し、後輩に本を譲りたいという想いを中心とした方々が数多くいらっしまったことを付記しておく。

がもらえる、という点を強調した。

本活の詳細については、本稿の第3章に譲るが、結果的にピア・サポーターが予想していた以上の反響であり、500冊近くの本が回収でき、400人を超える来場者を迎えることができた。また、利用者とピア・サポーターが会話する場面が多く見られた。これらによって、成員のモチベーションが上がった。加えて、本活では、アンケート調査を行い、学生のニーズの調査も行った。直に学生と会話をし、アンケート調査の結果を検討することで、組織の位置付けの明確化にも影響を与えたと考えられる。

また、この本活によって、第3期メンバーである堀氏はピア・サポートのことを知り、松田先生の講義を受けることを決定したそうである。つまり、本活は、成員の人数の維持の役割も果たしたと言える。イベントのデザインの仕方によっては、利用者に、イベントのデザインを行った組織や人への良い印象を形成することができる。逆に言うと、考えの浅いイベントのデザインを行うと、利用者に、イベントのデザインを行った組織や人への悪い印象を形成することになるため、注意が必要である。また、本活に参加したという一年生にヒアリングを行う機会が得られたのだが、その一年生は本活には参加し、本を持ち帰っていたにもかかわらず、本活を実施したグループが「ピア・サポート」だということを知らなかった。イベント実施時には、ピア・サポートのことも紹介するようにメンバーには周知していたのだが、実際の対応の中でうまく伝わっていなかったことが明らかになった。やはり、成員による組織の位置付けの認知は重要である。成員それぞれが、自分たちの組織のことを理解し、自分の言葉で相手に伝えることができるようになっていることは、イベント実施の際にも重要である。

2. 7. 3. 広報ビデオ制作

広報ビデオ制作とは、広報ビデオ「苦楽戦隊 ピア・レンジャー」の制作である。ビデオカメラによって撮影し、編集ソフト「EDIUS」を用いて編集作業を行い、作成している。

広報ビデオ制作については、その名の通り広報の活動である。詳細については、本稿の第5章をご参照いただきたいが、広報の方法としてビラやチラシ、ポスターといったものでなく、動画制作を選んだ理由として、多くのメンバーが携わる必要がある、ということが挙げられる。モデルを意識し、出来るだけ多くのメンバーに自分の組織の位置付けを考えてもらい、モチベーションを上げてもらうことが出来ればと企画した。

特に深くかかわった小林氏、青柳氏、岡本については、設定、脚本、背景などの小道具制作、撮影、編集などの様々な段階で、組織の位置付けを考えることとなった。モチベーションについても高まりを見せている。筆者の個人的な感想になるが、小林氏、青柳氏に関しては、広報ビデオ制作に関わる前と後では、仕事の進め方やコミュニケーションの取り方に関するスキルが非常に高まっているように見える。また、彼女らを支えるために、他のメンバーも様々な形で協力し、質の高いものを作り上げようと奮闘した。

また、広報ビデオ制作には、ピア・サポーターやピア・サポートに関わる教員の協力はもちろん、それ以外の方々の力を借りる場面も多くあった。たとえば、北大農学部が管理する農場や、教務学生支援課の事務職員の方々、商店の方々にご協力いただいている。このこと自体もピア・サポートを知ってもらう広報の役割を果たしていると考えられる。

加えて、今回ピア・サポーター以外の学生の協力を得られたことで、活動の新たな側面を見ることができた。文学部4年の鎗水孝太氏が、広報ビデオ制作に音楽や音響で参画してくれたのである。彼は、2011年1月17日から1月28日までピア・サポート室を用いて写真展を行った「二次元芸術研究会」のメンバーである。モデルに戻って考えると、成員の維持、と言っても、正規のピア・サポートメンバーだけでなく、ピア・サポートをサポートしてくれる成員を増やしたり、維持したりすることも、今後のピア・サポート運営の際には重要な観点となるだろう。

広報ビデオの内容は、以下のようなものである。

はるか昔、北大星の人類は、クラーク星人から大いなる経典を授かる。その経典に書かれた言葉の中の一節が、かの有名な *Boys be ambitious* 少年よ大志を抱け、である。その経典に書かれた知識を使い、北大星は繁栄を極めたが、誤った大志を抱いてしまった北大星の人類は、戦争を初めてしまう。今まさに戦の火ぶたが切って落とされようとしたその時、クラーク星人は女神の姿をして北大生に降り立ち、争いを調停した。このように、クラーク星人はいつも北大星人を見守ってきたのである。そして、現在、北大星では、人間関係や、研究、学び、暮らしなど様々な場面で悩める人々が出てき始めている。こうした状況を憂慮したクラーク星統合政府は、北大監察局員の *Wasabi Sushi Clark* を北大星に派遣し、北大星人の様子を調査させる。調査を開始した監察局員の目には、学生が様々なことで悩み苦しむ姿が映った。クラーク星人の介入もやむなしかと思われたその時、どこからともなく現れたのは、5人の戦士「苦楽戦隊 ピア・レンジャー」であった。

SF的な展開であり、ユーモラスな部分などもあるが、設定については、メンバー内で何度も打ち合わせを重ね、その過程で、実際のピア・サポートの立ち位置を明確化するのに役立った。北大星人は北大生を示しており、ピア・レンジャーはピア・サポーターを指している。クラーク星人は言うなれば大学を指している。

ピア・レンジャーは、北大星人である。クラーク星人の意思を継いではいるのだが、北大星の一員であり、自助努力によって今回の困難を乗り越えようと立ち上がった戦士という設定である。

この広報ビデオ「苦楽戦隊 ピア・レンジャー」の特徴は、以下の4点である。1点目は、「目立つ広報」である。チラシやビラ、ポスターなどは、細かい情報を書き込む

ことができる一方で、サークルや部活など様々な団体が、特に新入生の歓迎時期に合わせて、大量に発行する。そのため、同様のメディアを用いて宣伝を行ったのでは、目立たない。細かい内実を利用者に知らせる前に、まず組織名称を認知させることも重要である。そのため、映像作品であり、そして、目を引くようなものを制作した。また、他組織とのネットワークを結ぶ際に、いわゆる販促資料のような形で用いることもでき、話を円滑に進めるためのツールとして用いることも可能である。2点目は、「アホな広報」である。渡邊誠先生は、本報告書の第7章「ピア・サポートにできること」で、教員と学生の間にもどうしてもできる立場の違いに言及し、ピア・サポーターはそれ乗り越える可能性があるとは指摘している。確かに、ピア・サポーターは学生であり、教員と学生ほどに立場の違いはないが、学生の間でもまた立場の違いが生まれる可能性は捨てきれない。特に、「ピア・サポート」という、あたかも大学に「良い学生」と認められた学生が指導的立場を担う、かのような名称および立場に立った学生に対して、ふとした悩みを気軽に相談できるだろうか。筆者がひねくれものであるだけの可能性も大いにあるのだが、筆者はなかなか素直にそういう場所に相談しに行くことはできそうもない。そこで、ふざけたコンテンツを作るアホな人達である、というメッセージを乗せつつ、組織の広報を行う「アホな広報」を行うのである。これによって、「こんなにくだらないことを考えて、発表してしまう人達なら、気軽に相談に行ってみよう」と、垣根を下げるのが期待できる。3点目は、「本気の広報」である。ただし、ただふざけるだけ、ただにぎやかにするだけ、ではむしろ人を不快な思いにさせてしまうことすらある。それゆえ、ストーリーや設定など、自分たちの組織について徹底的に考え、こだわって組み上げる。前述したが、そうすることによって、自分たちの組織の理解が深まるという利点もある。4点目は、「背伸びの広報」である。出来ることをこなすのではなく、やりたいことをやってみる広報のことを指す。具体的には、ビラやポスターなど、これまでにやってきたことではなく、映像制作という、新しいスキルが多く必要な広報を行ったことを指す。ピア・サポーター自体が様々なチャレンジを行い、新たな経験をしていく組織であることが理想的であると考えられるし、新たなスキルを身に付けられる場を形成することで、成員自身がピア・サポート活動に関わっている意味を見出しやすくなると考えられる。

広報ビデオについては、まだ完成、配信を見ておらず、どのような成果や課題をもたらすかについては、今後も経過を注意深く観察する必要がある。

2. 8. 活動報告の重要性

以上、整理してきたように、ピア・サポート室では様々な活動を行っている。ここでは、その様々な活動を学内学外含めて様々な場面で活動報告を行うことの重要性について述べる。

北海道大学ピア・サポートでは、教職員のアドバイスを受けて、様々な場で自分た

ちの組織について、発表する機会を得ている。たとえば、2010年2月10日には、「ぴあのわ」参加の報告会、2010年8月16日には「ピア・サポート活動報告会」を、北大にて、関わってくださっている先生方や教務学生支援課の方々、ピア・サポーターに対して行った。また、2010年11月4日には、新ピア・サポート室にて、「新ピア・サポート室開室記念お披露目式」を行い、副学長や教職員、ピア・メンバーを前にこれまでの活動と今後の展望を発表し、意見交換を行った。また、イベントを行った後に反省を行い、関連するアクターに対して説明に行くことも行っている。イベント本活終了後に、生協の書籍部に対して、イベント趣旨の説明と意見聴取のためにミーティングを依頼し、2010年12月13日に実施した。当日は生協の書籍部の方お二人にいらしていただき、ピア・サポーター3名（岡本・厨川・青柳）と意見交換をしていただいた。2011年度本活は生協の書籍部と協力して開催する方向になっている。こうした、大学内での報告活動は重要である。活動の報告をしつつ、次の活動の構想を述べて意見を聴取したり、教職員やピア・メンバー、関係者からの指摘を得たりすることができるからである。このような場を設けることで、ピア・サポート活動への理解が得られ、活動をスムーズに進めていくことができるのである。いくらピア・サポーター内で議論を重ね、そこで価値観を共有していても、教職員の方々や関連機関の方々の了解を得られなければ、実施するのは難しい。これは、ピア・サポーターが趣味のサークルや部活とは異なる部分である。担当の教員や事務の学生支援課スタッフ、他関連するの方々に対する説明責任がある。

学外に対する活動報告も行っている。2010年8月20日には平成22年度IDE大学セミナーにて、アカデミック・サポートセンターの日吉大輔先生と共に『アカデミック・サポートとピア・サポートによる学習支援』と題して、発表を行った（日吉・岡本 2010）。また、北見工業大学のピア・サポーターから依頼を受け、2011年2月23日に「北見工業大学ピア・サポーター来室記念「ピア・サポート交流会」」と題して、交流会を行った（岡本ら 2011）。このように、学外に向かって自分たちの活動を説明する機会を得ることで、自分たちの活動を自省的に見直すことができるとともに、他大学の活動を知ることができ、活動を考える際の様々な材料を得ることができる。

2. 9. つながり創出型ピア・サポート

ここまで北海道大学ピア・サポートの活動を整理しつつ考察を加え、ピア・サポート活動を行っていく上で注意すべき点やなどを論じてきたが、北海道大学ピア・サポート全体の役割について述べて、筆をおきたい。

北海道大学ピア・サポートは、「つながり創出型ピア・サポート」を目指して活動していきたいと考えている。

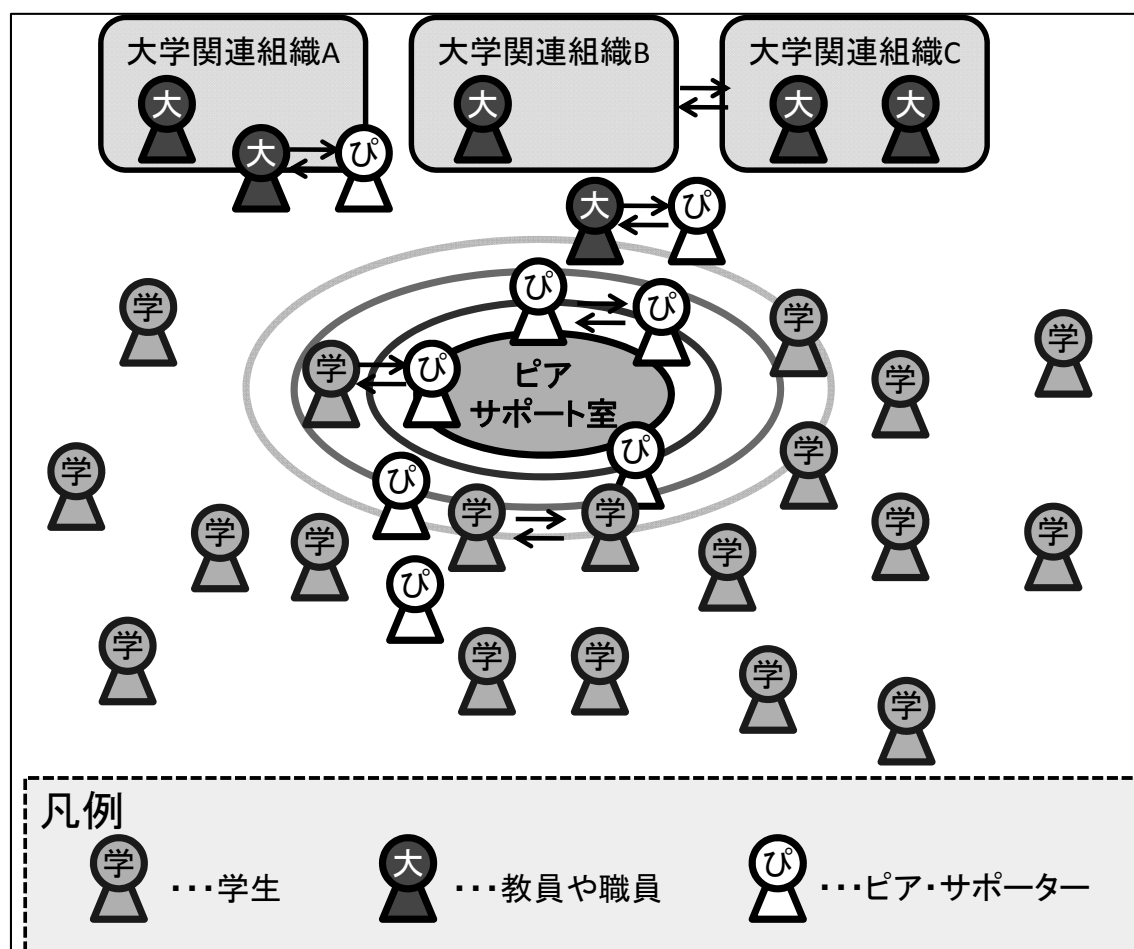


図5 つながり創出型ピア・サポートのイメージ図

つながり創出型ピア・サポートのイメージ図を上図5に示した。大学の中には、様々なアクターが存在するが、ここでは、「学生」「教員や職員」「ピア・サポーター」の3つを想定している。大学に関連する組織を大学関連組織とした。これは、大学内の公的な組織のことであり、大学生協などもこの中に入る。部活やサークルについては、学生に分類される。

図5の中心にある楕円の中心部分が物理的なピア・サポート室の範囲を示している。ピア・サポーターは、日々の活動の中で、ピア・サポート室を活動の拠点として、教員や職員、学生と相互作用していく。また、イベントの企画や運営を通して、ピア・サポーター同士や学生同士の相互作用、大学関連組織同士の相互作用なども生み出していくことができる。こういった活動をピア・サポートが推進していくことによって、ピア・サポート室を中心にして、大学内に社会関係資本が蓄積されていくことが予想される。図の中の同心円の広がり、そのことを表現している。ピア・サポートが物理的な場所を中心にして広がっていくイメージである。悩みを抱えた学生に対して1対1で対処療法的に相談によって解決していくことは、それはそれで極めて重要なことである。しか

し、北大ピア・サポートでは、そうした活動も地道に行いつつ、そういう学生を生み出しにくい、あるいは、生み出しても相互扶助が自然に起こり、解決してしまう、そのような環境を作り出していくことを目標としたい。様々な働きかけにより、大学内の社会関係資本を豊かにしていくことによって、大学全体に活気をもたらし、学生をはじめ、教員や職員、地域住民も巻き込み、多様な価値観をゆるし、関わる人それぞれが豊かな生活を送ることができる大学を作り上げる一助となりたい。

【参考文献】

宇野常寛(2008)『ゼロ年代の想像力』, 早川書房

大石由起子(2010)「高等教育におけるピアサポート導入の教育的効果と期待」『大学と学生』, 87, pp.16-21.

岡本健(2007)「観光地における持続可能なボランティア組織の条件 —北大キャンパスビジットの事例から」『日本観光研究学会全国大会論文集』, 22, pp.363-364.

岡本健・藤原美津穂・青柳祥子・小林なつみ・中根宏樹(2011)「北海道大学ピア・サポートの紹介 —活動概要とイベントの詳細について」『北見工業大学ピア・サポーター来室記念「ピア・サポート交流会」発表用スライド』

【ダウンロード URL】 <http://hdl.handle.net/2115/44890>

金子郁容(1992)『ボランティア —もうひとつの情報社会』 岩波書店

菅野仁(2008)『友だち幻想 —人と人のくつなぎ>を考える』, 筑摩書房

土屋貴之(2010)「ピア・サポートの可能性」『大学と学生』, 87, pp.29-43.

土井隆義(2008)『友だち地獄 —「空気を読む」世代のサバイバル』, 筑摩書房

早坂浩志(2010)「学生に向けた活動 2 —授業以外の取組み」日本学生相談学会 50 周年記念誌編集委員会(編)『学生相談ハンドブック』 pp.185-201.

日吉大輔・岡本健(2010)「アカデミック・サポートとピア・サポートによる学習支援」『平成 22 年度 IDE 大学セミナー発表用スライド』

【ダウンロード URL】 <http://hdl.handle.net/2115/43898>

北海道大学学務部(2006)『学生生活実態調査報告書』, 北海道大学学務部

山田剛史(2010)「ピア・サポートによって拓かれる大学教育の新たな可能性」『大学と学生』, 87, pp.6-15.

Okamoto, T(2008)「The role of student volunteers in tourism and building up a sustainable operating system : the "Providing Information and Knowledge Model" and the "Common Pleasure Model"」『Sustainable Tourism III』, pp.121-129, Wit Press

